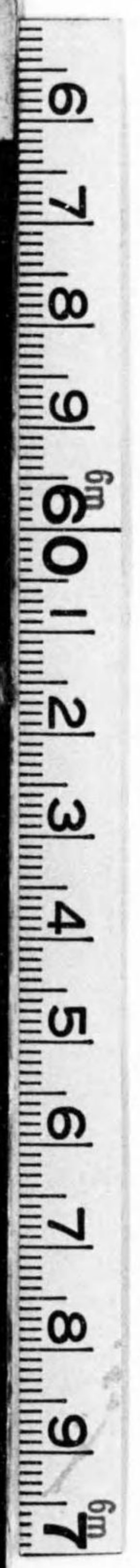


特261  
852



始



Small rectangular label with illegible text.

海峽の通史

許 巖  
答

Fragment of white paper or tape on the right edge.

Fragment of white paper or tape on the right edge.

特 261  
852

蘇子園集

蘇子園集

蘇子園集



東宮御歌

立山の空を

そはゆるをいふに

なほ屋とて思ふ

と代乃をうたも

東宮侍従長入江守謹書

立山の空にそひゆるを、しさに

ほらへとそ思ふ御代のすかたも

畏くも

今上陛下 東宮におはします當時 大正十四年新年歌

御會御題 山色連天 に 詠進遊ばされた玉什でご

ざいまして その前年 大正十三年十一月 北陸地

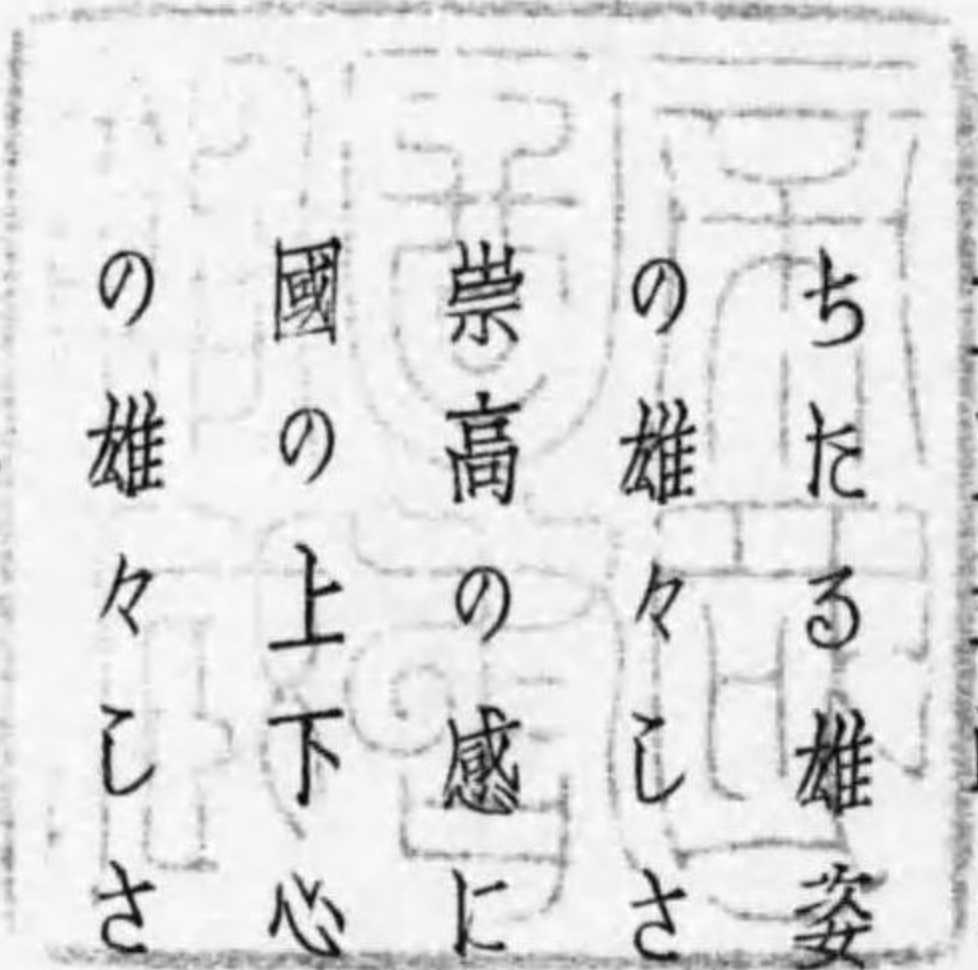
方における 陸軍特別大演習御統監のみぎり 親し

く 立山連峰を御覽遊ばされた御印象を かくは御

詠みいでさせられたるものと 拜察し奉るだにかし

こき極みでございます

謹釋大意



立山連峰の巉巖轟々として高く大空に聳え峙  
ちたる雄姿は如何にも豪宕雄偉にして男性的  
の雄々しさを餘蘊なく發揮し觀者をして雄大  
崇高の感に打たれしむるものあるをあはれ皇  
國の上下心を一つにして此の立山の勇猛剛健  
の雄々しさを知らひ學ひ不動山の如く堅固巖  
の如く百折撓まさる雄心を以て學を修め徳を  
養ひ公には國の爲め私には家の爲め其の心力  
を竭盡して大御代の姿即ち皇國の國運の此の  
立山の卓然として羣山に傑出せるか如く世界

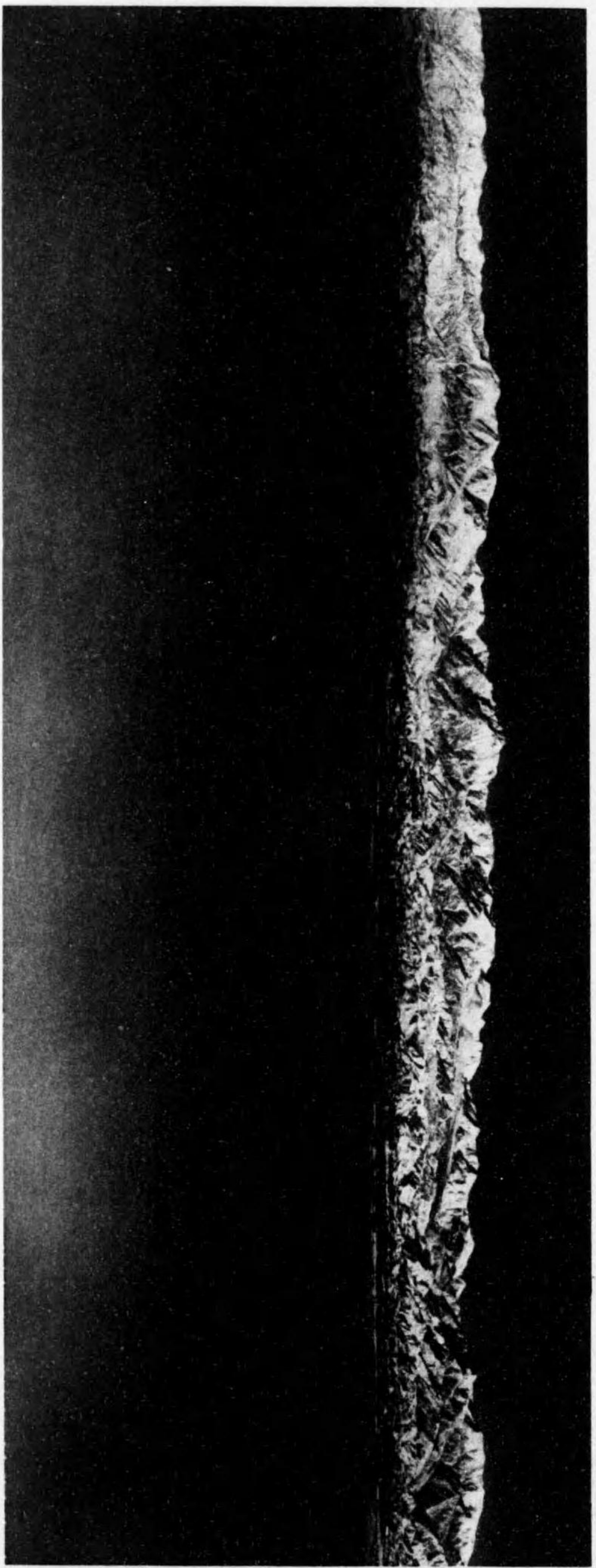




萬國に超越せむことこそ望まじけれとの御心  
をかくはものし給へるならむと推量り奉る存  
り

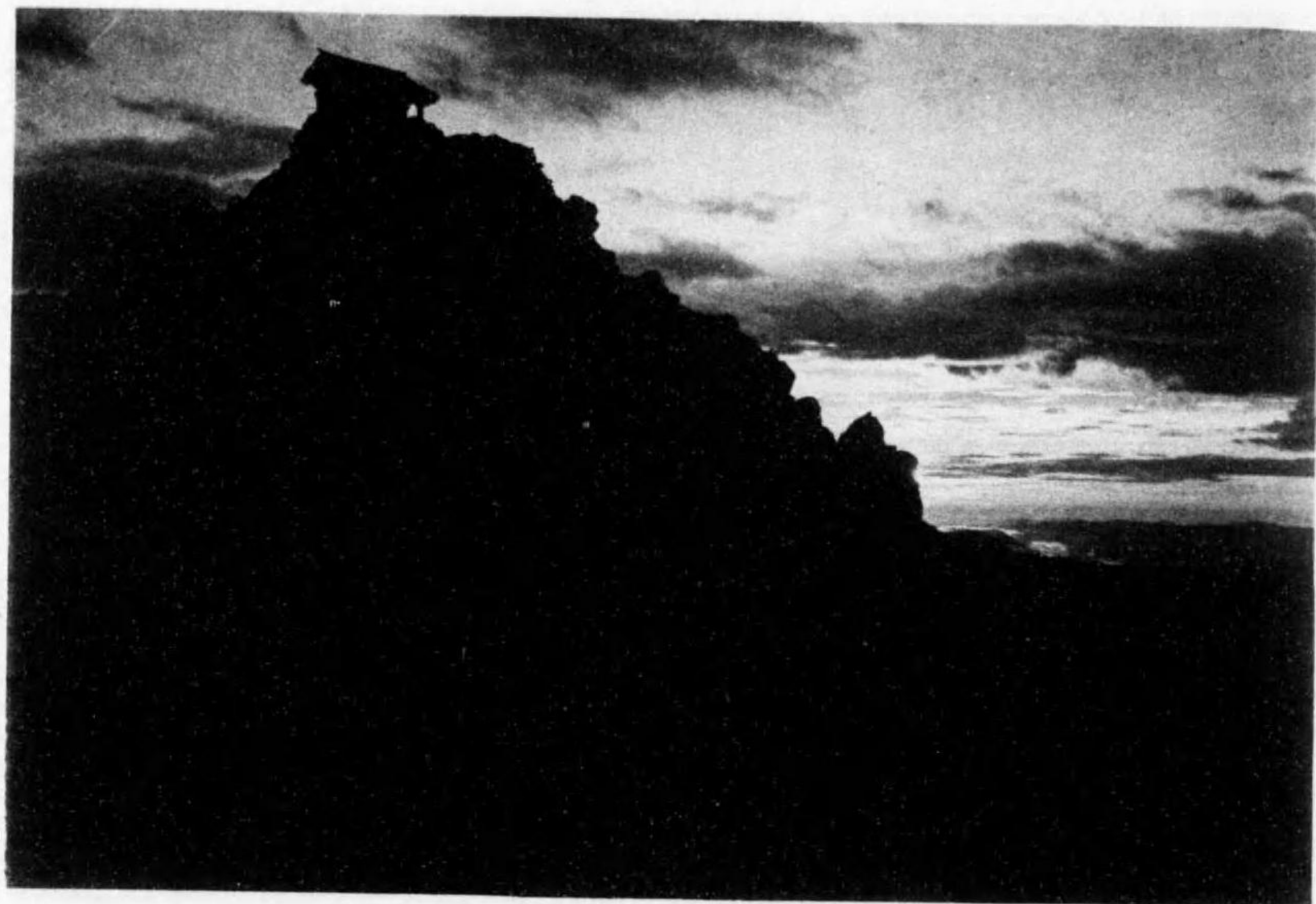
二

吉田増藏謹識



立 山 連 峯 大 觀





立山頂上 雄山神社 曉天の壯觀

立山は	立山は	立山は	立山は
私達の	私達の	私達の	私達の
生命です	希望です	歡喜です	矜持です

大伴家持

多知夜麻爾

布里於家流由伎乎

登己奈都爾

見禮等母安可受

加武賀良奈良之

立山を讚へる

立山は 私達の 矜持です

立山をもつ と云ふことは 私達の矜持です  
大きな 矜持です

何ものにも 代へ難い 大きな矜持です

立山は 私達の 歡喜です

朝に 夕に 立山を 指呼び得る と云ふこ

とは 私達の 歡喜よろこびです

大きな 歡喜よろこびです

そうです

何ものにも 代かへ難い 大きな歡喜よろこびです

立山たちやまは 私達の 希望のぞみです

車窓に 屋上に 街路のつきあたりに 野の

はてに 立山を 飽かず眺め得る と云ふこ

とは私達の希望のぞみです

大きな 希望のぞみです

そうです

何ものにも 代かへ難い 大きな希望のぞみです

立山たちやまは 私達の 生命いのちです

明けても 暮れても 四六時中 私達に喚よび

かけてゐる立山は 私達の生命いのちです

大きな 生命いのちです

そうです

何ものにも 代かへ難い 大きな生命いのちです

天地創造の神が

特に

私達の 前途を 祝福して

天さかる 越の 曠野の 唯中に

どつかと 鎮めて くれたのが

立山です

それは 神々の 創造中の 最も傑れた作品

の一つです

神 秘 と

莊 嚴 と

雄 大 と

宇宙の 全靈を 凝結して 彫心鏤刻

出来あがつたのが  
立山です

天地開闢の古から

窮りなき永劫まで

雲表高く そゝりたつ立山の 不可思議に

私達の祖先は

驚歎の眼を睜り

畏伏の心を 戦かせ

信仰の聖火を 點じた

悲しみの時も 喜びの時も 絶望の時も 歡

喜の時も

まづ

立山を 仰ぎ

立山に 祈つた

彼等は そこに

盡きざる いましめと

遙かたる

理想を發

見して 勇躍した

そこには いつでも

人間の生活を 指導する 原理が

曉の明星の如く 輝やいてゐた

それなのに

私達は

何故 驚かたのか

何故 畏れたのか

何故 仰がたのか

なぜ 生活の尊い原理を 發見しやうとせぬ

のか 山の啓示に 耳を傾けやうと せぬの

なぜ かの

か

私達は あまりに 山を見られたのだ

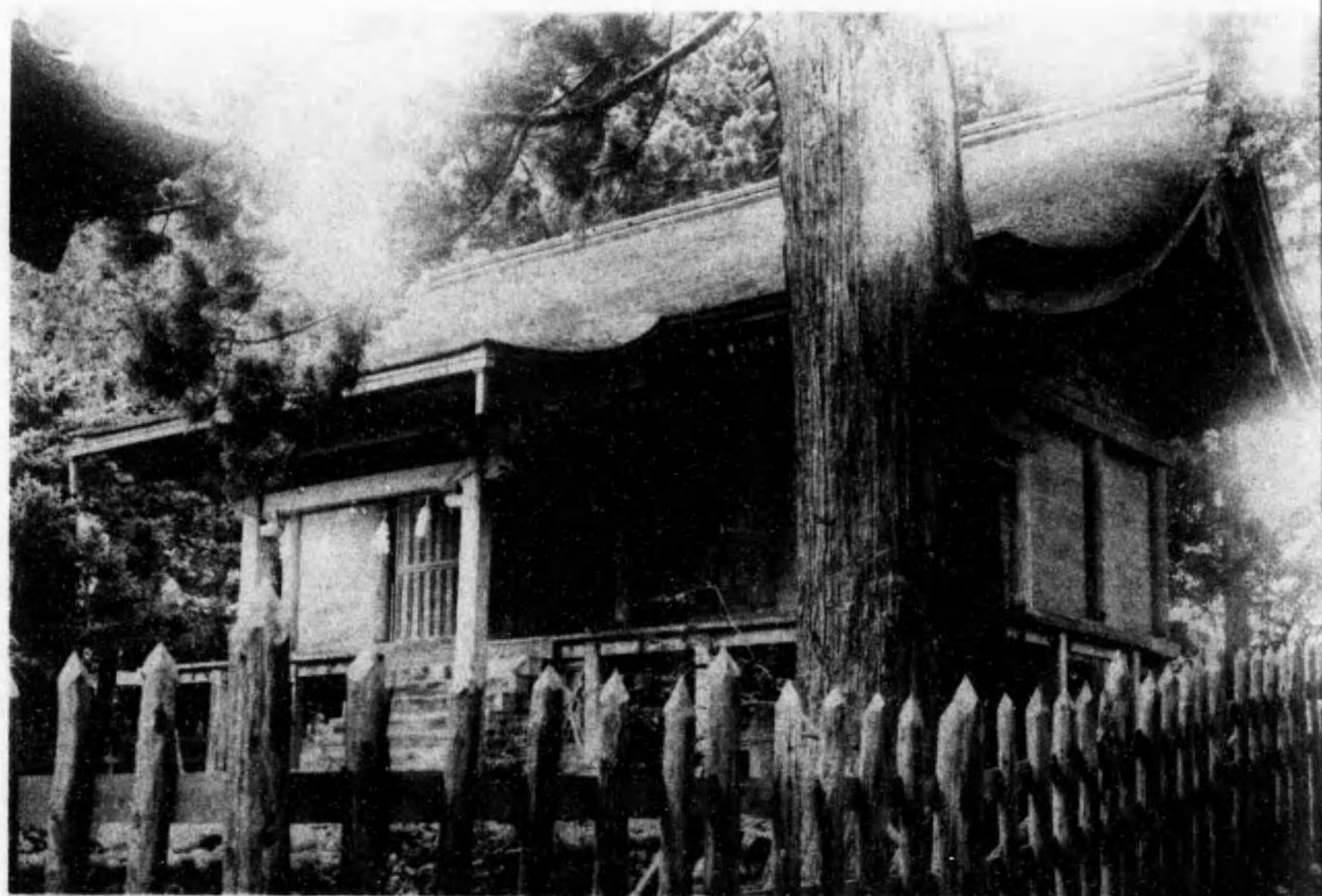
私達は あまりに 山に押れすぎたのだ

もつと 山を見つめて下さい  
 古への 祖先の 童心にかへつて  
 もう一度  
 しみじみと 山を見つめて下さい  
 霞の立山を  
 残雪の山膚を  
 一碧の山容を  
 白銀の山を  
 曉の立山を 黄昏の立山を

立山は 私達の生命です

永遠の生命です  
 そうです  
 何ものにも 代へ難い 永遠の生命です  
 自然の恩恵と  
 敬虔なる心

立山は 私達の 生命です



國寶 雄山神社前立社壇

敬 虔

深々たる 常願寺の流れ

静寂の境

大寶の古より 鎮座ます

雄山の神 靈威いやちこに

五間社流造の本殿は

右大將 源頼朝公の寄進にて

素樸と雄健

古雅と幽玄

開山





立山開祖 佐伯有頼 童像

童 心

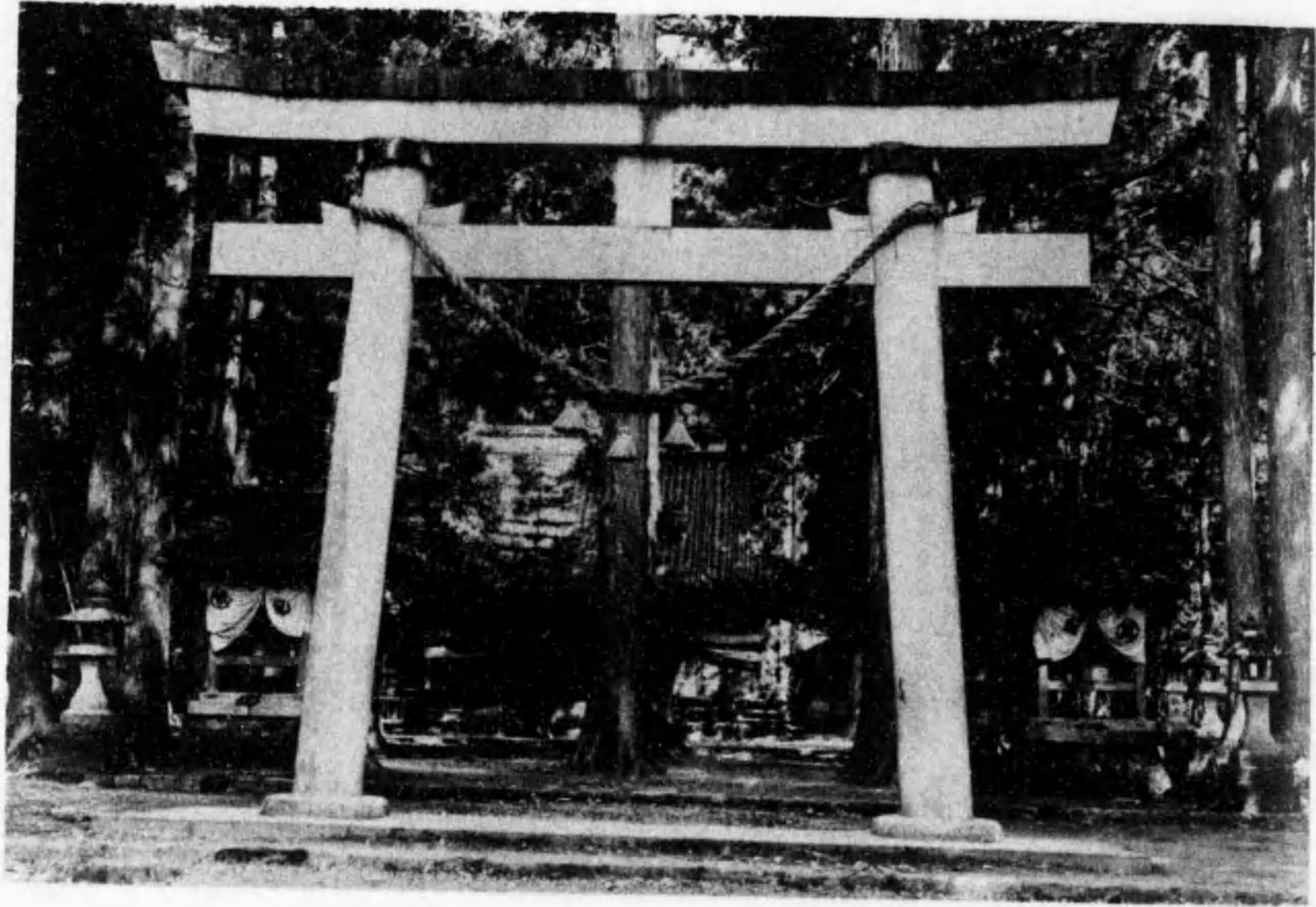
童心の 指さすところ  
そこに 神秘の世界がある  
邁<sup>ま</sup>け！

白鷹 はぐたき  
立<sup>た</sup>山<sup>やま</sup>は 招く

今は亡き 大井冷光君が 大正四年の比 有頼像建設を思ひたち  
その童心の世界に生れ出た 少年有頼卿の像 畑正吉先生苦心の作



國寶 晩年の佐伯有頼卿



立山々麓 芦峯寺大宮 祈願殿と開山堂

讚<sup>さん</sup>

仰<sup>ごう</sup>

魁偉の相 剛健の氣

眉宇に迸しる 百難折伏の意氣

鐵<sup>くわが</sup>の意<sup>こころ</sup> 溢るゝ力

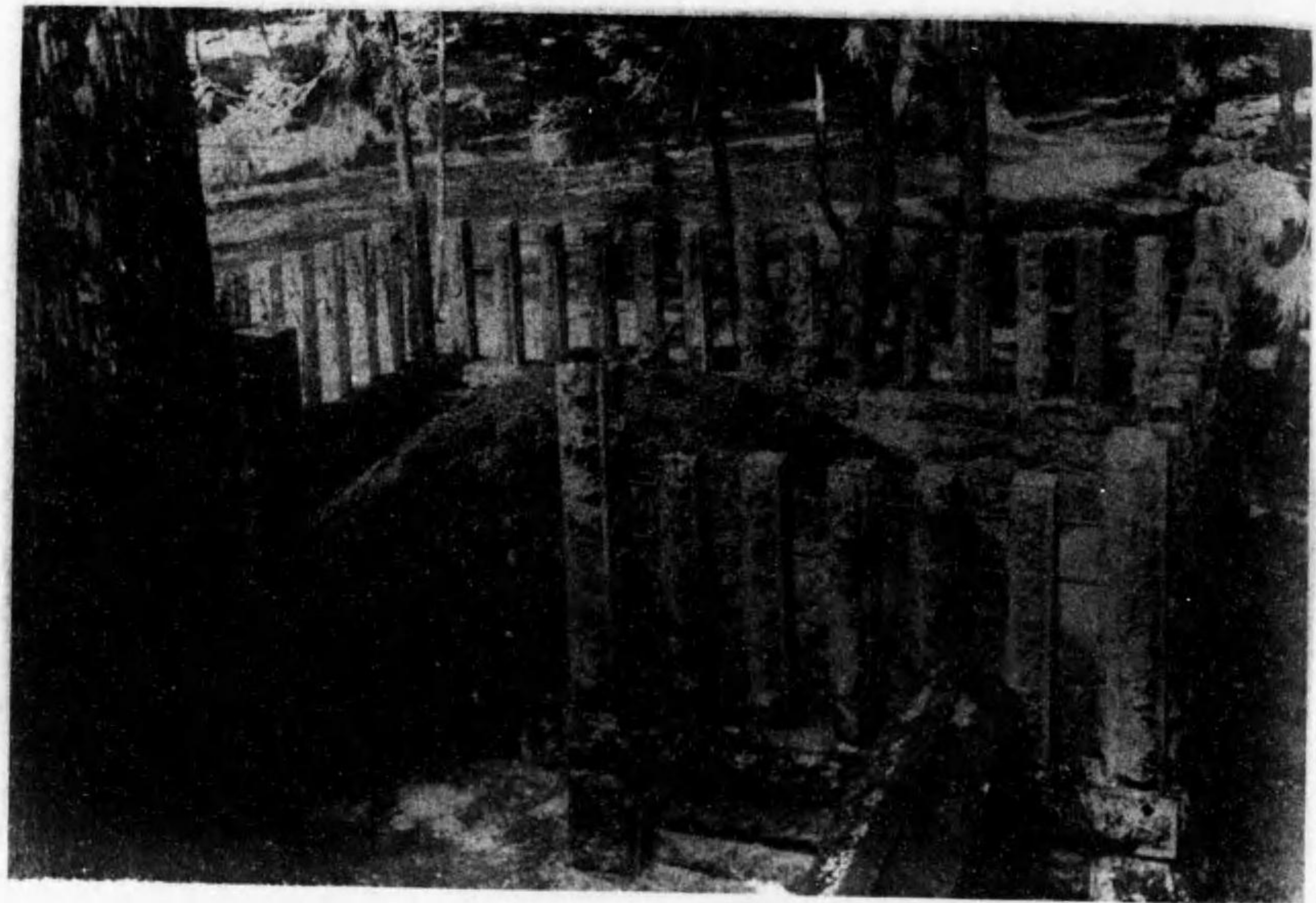
開山の偉業 永久に輝く



開山堂 國寶有頼卿像安置

靈域

千年の老杉 晝暗き  
 こゝ 大宮の 靈域  
 開山 有頼卿の 功業  
 とこしへに 跡をとゞめて  
 立山に わけ入る若人ら  
 ことなきを こゝに 祈り  
 よろこびを こゝに 謝す



開山御廟

真  
齋

々

轟々たる 巨杉のもと

夢 結ぶ 草の庵

そのかみ 有頼卿

出でゝは 山を開き

入りては

五風十雨を 祈り給ひしところ

靈應の行方

山田

墳 墓

天籟 聞として

草苔 滑らかたるところ

偉大なる魂

永遠に眠る

崇高なる靈

永劫に鎮る

幽邃の情 敬仰の心

少年佐伯有頼

立山開山緣起

天下の靈山 立山は 今を去ること 千二  
百有餘年前 人皇四十二代 文武天皇の御宇  
わづか十二歳の越中少年 佐伯有頼によつて  
開かれたので あります

有頼の父 有若は 布施の犬山に城を築い  
て 越の中つ國を鎮めてゐましたが 白羽の  
靈鷹を 秘藏してゐました

大寶二年の或る日

有頼少年は 父の白鷹を請ひうけて 鷹狩  
に出かけました

曠野の涯に未遠く そゝり立つ 靈峰立山の  
萬年の雪をいたゞく偉容は どんたにこそ  
純真な少年の心に 莊嚴神秘の念を 起させ  
た事でせう

放たれた白鷹は 羽搏きも勇ましく 大碧  
空高く舞ひあがつたまゝ つひにその姿をか  
くして仕終ひました

待てども 待てども 歸り來ぬ 靈鷹  
呼子の笛に 空しく黄昏れる 山河

詫びるわが子の姿を じつと眺めた父の有  
若は わが子を試すは この時だと考へたの  
で 鷹を捕へてかへらぬ中は 館へ入ること  
はなりませぬ と 云ひわたしました

いづ地去りけん白鷹の 行方たづねて 昨  
日も 今日も 髪を美豆良に 弓矢を持った有  
頼少年 たゞ一人 野と云はず林と云はず  
雨にたゞかれ 風にくしけづられ 捜し求め





富山市主催 日新産業大博覧會  
郷土館 全七景の第一景

まじたが どこにも その姿らしいものを  
求める事が できませんでした

されど 屈せぬ 有頼少年の 初一念  
ふと 迷ひ込んだ晝尙小闇い林の中で 出  
會つた白髪の老人に 白鷹の行方を 教へら  
れ 喜び勇んで 進むうち 行手の谷の上を  
ゆるやかに 飛んでゐる 銀の鳥を見つけま  
した 捜し求める 靈鷹に 相違ありません

喜びに 胸躍らせて 吹き鳴らす呼子の笛  
に 白鷹は 颯と風を切つて 舞ひ下りたか

靈鷹のゆくへ

いづ地去りけん 白鷹の  
ゆくへ探ねて はるくくと  
高志の野山を たどりゆく  
東に たかき 太刀の峰

熊 追ひかけて 唯一人  
険しき山路 雪の溪  
いただき近き 巖窟にて  
示現を仰ぐ かしこさよ

と見るうちに 有頼少年の拳の上に とまり  
ました この時 傍の叢から 不意に大きな  
熊が 有頼を目かけて 襲ひかゝらうとした  
ので 鷹は驚いて 空高く舞ひあがりました

『おのれ 憎くき熊奴！』と 月の輪に 一  
矢を射こんだまゝ 夢中になつて 熊のあと  
を追つかけ 稱名川の急流は 忽然として  
あらはれた 金色の猪の背をかつて 難なく  
うち渡り 次第に 山深く 分け入りました

赤い糸をひいたやうに 點々とつゞく 熊

の血を辿るうち 頂上近くの大きき岩窟に  
熊のありかを つきとめた 有頼少年 弓を  
満月のやうに ひきしぼつて 一矢をはた  
うとすると 闇の中から 眼をさす まぶし  
い光明

熊とはおもひの外 神々しい神様が 胸に  
矢傷をうけたがら にこやかに 示現ましま  
すでは ありませんか  
そして あまりの かじこさに ひれ伏す  
有頼少年に 霊峰立山を開けよと おごそか  
に お告げが あつたのであります

白鷹も 大熊も 金色の猪も 白髪の老人  
も 有頼を導かんため 雄山の神が かりに  
御姿を現じたまふたので あります

この由 大和の帝へ 上聞に達しますと  
奇特の至りと 長くも みことのりを 賜  
ひ 有頼卿八十三歳で 歿くなるまで 此の  
少年の日の魂をすてず 開山の事に 力をつ  
くされたので ございます

爾來 越中の青少年は 有頼卿一生の 忍  
苦成就を 自ら體驗するため 必ず立山へ参

# 富山電気鐵道

二〇

諸君之を以て 男子最初の試練としてゐる  
ので ございます

巖川安信記



富山電氣鐵道株式會社  
取締役 佐伯宗義

富山電鐵社歌

一、黎明の曙み渡りたる 空遙か

大立山を仰ぎつゝ、朝な／＼を業につく

われらの心すが／＼じ

一、鋼鐵のレール延びゆく 海山に

自然の資源うち拓き 文化の光輝じ立つ

われらの使命いや高し

一、北陸の地に 魁し 高遠の

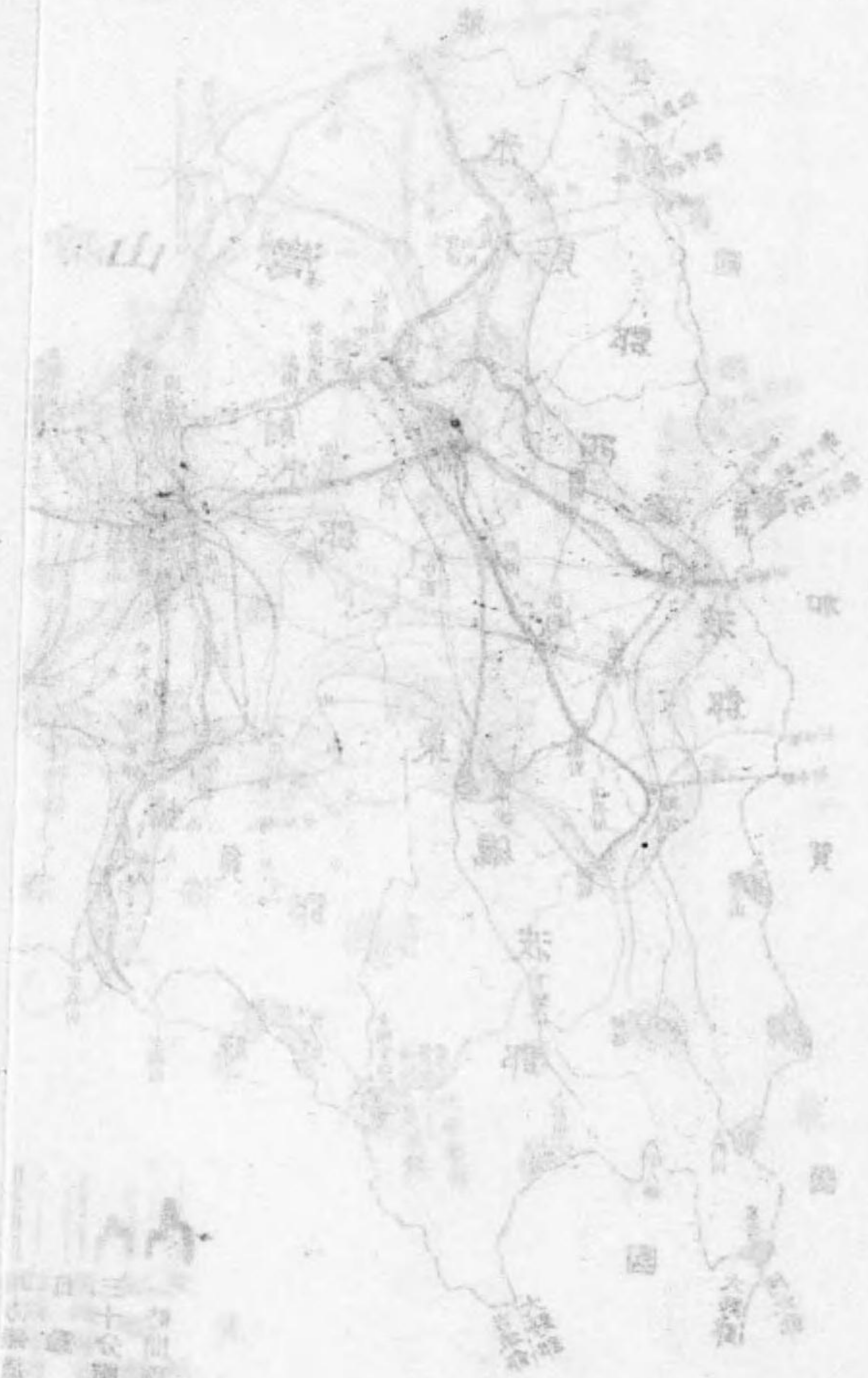
わが電鐵は燦として 永久に榮譽を失はず

北都の空に 聳ゆなり



富山電鐵驛

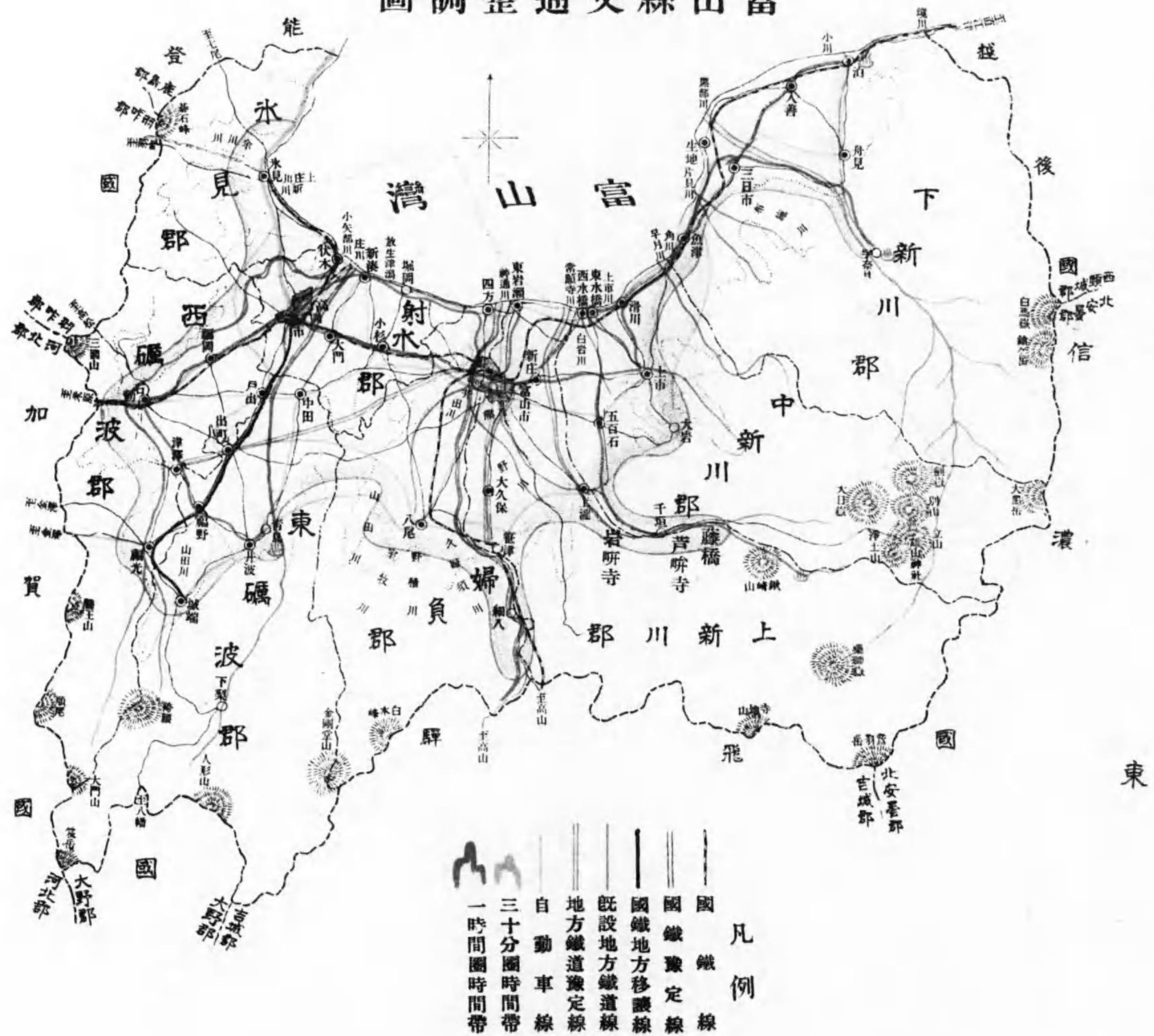
湖南鐵路圖



比例尺  
1:100,000  
編者  
交通部  
出版  
民國二十一年

本圖係根據最新測繪資料編製，其路線之長短與實際距離無異。凡欲知其詳細情形者，請向各該管鐵路局索取說明書。本圖之編製，旨在便利交通，促進經濟發展，實為湖南建設之重要工具也。

### 富山縣交通調整圖



本圖ハ富山縣ノ地勢ト交通實情ニ即シ最モ理想的ナル交通統制網ヲ想定シ富山市ヲ中心トシ縣下八十万人口ノ大部ヲ三十分時間帶ニ置キ全體的ニハ之レヲ一時間帶ニ收メテ全縣一市街化ノ交通理想ヲ表示セルモノナリ



富山縣



富山縣は立山を主座とする中部山岳の諸峰三面を圍繞し之れに源する諸大川は豊饒なる越中平野を潤して日本海に瀧いでゐる。

### 富山電氣鐵道の使命

專務取締役 佐伯宗義

富山縣は立山を主座とする中部山岳の諸峰三面を圍繞し之れに源する諸大川は豊饒なる越中平野を潤して日本海に瀧いでゐる。

吾が越中人は古來自然の惠澤殃禍悉く之れを立山に享け朝暎夕陽に仰ぎ見る立山の偉容は越中人の崇敬欽仰の象徴であり越中魂の根源となつてゐる

人智の發達は禍を轉して福と爲し先人積年の經營を一朝

にして壊滅せしめたる恐るべき水魔の威力も今や産業の資源たる水力電氣と化し立山開發は精神鍛練の道場たると共に物質界へ無盡の寶庫を拓き本縣をして我國最大の電氣王國たらしめた。

今や東亞の正氣は凝結して善隣滿洲の肇國となり相對して日本海の關門を占むる本縣は本土の中樞帶を背景として内には天與の港灣を擁し水利の大自然力を運用し正に劃期的躍進の縣勢にある。

抑々文化産業の發展は交通機關其の先驅を爲し更に現時高度の經濟文化は交通機構の整調擴充の上に建設せらるべきものとする。

是に於て富山縣の交通情勢を見るに縣政治經濟文化の主都は縣の中軸に位置し誠に均衡の得たる縣勢を備へ其の交通施設は北陸本線東西に貫通し高山線は此處より丁字型に縱走して中京に結び以て國家幹線交通に應ずと雖も他面複雑化する地方流動交通に對しては一元的に之れが疏通に任ずる施設を缺き隆々たる縣勢に副はざる憾みがある。

凡そ行政は中央機關によりて司宰せらると雖も地方には中央廳の機能を局小せる機關を以つて自治的運行に當らしむ。然るに産業文化の原動力たる交通施設に於ては國家的交通整備の鐵道行政廳にして地方流動の交通に對する自治的統制機關を缺き局部交通に當る地方交通機關は其の分立

散在の儘無統制裡に委せらるゝ状態である。

惟ふに鐵道國營の原則の下に於て地方交通機關存立の要諦は國營交通機關が全面的に有する機能を局小せる機構を以つて一定勢力圏内に於ける全的交通整調の獨占にあり即ち地方自治的交通統制を附與するに非ずんば恐らくは鐵道國營の意義をも失ふものたるを確信する。

されば現に國營交通事業に屬する交通施設と雖も實質的に地方交通に任ずる施設は之れを地方に委譲し一定中樞勢力圏内の鐵道自動車は擧げて一經營機關に統一支配せしむるを要する。

國營交通事業は本來是等地方中心交通を聯合貫通し専ら國家的幹線交通の整備に任ずるものにして此の中心交通點の大驛集中運営を主とすべく施設の重複競合は之れを廢合調整し更に主要都市交通には航空網を充備し立體複合的に交通機構の全面に亘り大乘的革新を爲すに非ざれば躍進膨脹の國力に沿ふ能はざるなりと思惟する。

當社は斯くの如き時代趨勢に鑑み隆々として興起止まざる縣勢の礎石として併せて交通機關統制の普遍的規範たるべく敢て艱難を冒し曩に本縣全體に亘る理想的交通網の整備を想定し先づ以て縣東半の完璧を期すべく茲に富山市を起點として新川三郡の中央を貫通するの幹線を建設し一端

は黒部鐵道と結んで縣東邊部に接し一線は縣營鐵道を通じて立山直下に達し更に全面的に自動車を配備して茲に略々縣東半交通の充備を期し得たのである。

轉じて吳山以西を觀るに高岡を中心として北に天然の良港を擁し南に兩礪の平野を展き鐵路南北に結んで縣西交通に備ふと雖も未だ縣東との融合全からず縣勢の均衡一元化に間然するものあり是に於て更に兩礪の中心より一線を設け以て吳西に縦走する全體交通を引具し富山に直入して東西相結ばんか縣都を中心として主要都邑の大部は三十分時間圏に包容せられ全縣八十萬人口を一時間圏帯に收め縣勢の一市街化を形成するに至る。斯くて行政の運用經濟の均

霑と縣民平等福利の一元に資し更に輓近大都市集注の動脈硬化的現象の還元作用と爲り一縣自治の健全體を爲すに至ると云ふも過言ならざるべく是に於て初めて本縣をして典型的理想郷たらしむるの礎石となり更に交通整備の國策規範を樹立するものたるを確信するものである。

昭和十一年九月二十八日印刷  
昭和十一年十月一日發行

富山電氣鐵道株式會社

印刷者 富山市殿町十番地  
原田清信

印刷所 富山市殿町十番地  
原田オフセット印刷所

338  
1104

終

